

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	行軍の道すがらよめる歌 : 文苑
Author(s)	下山, 氷川
Citation	龍南會雜誌, 4 2 : 3 5 - 3 7
Issue date	1895-12-26
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4757
Right	

(三)

羽の形の博多こそ
澳の濱なる石垣ハ

もろこし船のよせたりし
寇し來りし異船を

袖の湊の名残なれ
拳下りに射出して

(三)

射伏せしものを福岡へ
つなげる舟の綱を輪に
誰が綱場どいなるけん
もろこし人の乗りし船

石は移して跡もなし
束ね敷きてぞ菅公を
上矢の鏑一筋と
つなぎ石てふ柱あり

休へまつりし綱輪をば
いひてすぎにし櫛田には

行軍の道すがらよめる歌

下山氷川

四日 百貫石より瀛船にのらんとするに汐干にて渡船通はず皆ひと衣かゝけて
かちわたりゆく

遠干かた衣かゝけてかちわたる今のくるしみ後のたのしみ

全日 こよい有明の海上に碇泊しぬあけかた空晴れて月清し
めつらゑやふねこさいてゝなかむれは沖にも月の有明の空

六日 途中中川校長より北白河宮殿下御薨御の報に接し内田教授の哀悼の演説をきゝて

心に感しけるまゝよめる

きたゝに身をは裂くともいとふへき國のみために神さりましたぬ

七日 名古屋城跡眺望

そのかみの人のこゝろも思はれて青海原の極みなく見ゆ

孫堂陳人壽 名古屋の城跡にのまれしを見ゆ

全日 呼子の浦

來ぬ人をよへや呼子のうち千鳥沖のなかめのあゝ時そなき

全 譯 人をして愧死せしむ

八日 霓の松原

えろたへのいそへを洗ふ白浪に影うちかすむ霓の松原

十一日 節婦れ政の石文の前をすきて

たをやめかたてしみさをのえろしかと仰けはいよゝ高き石文
つるきたちとりはく身にもなかくにこのたをやめよまさらさらめや

十二日 若松港の賑ひを祝ひて

名にしれはゝいよゝ榮えよ若松のはまのにきはひ千代に百々代に

十四日 粟屋五百藏君の靈を祭れるをりよめる

ぬきもてる大刀の光もくもりけり君かきたまのかけのうつりて

十五日 各地方の勸迎をうけて

よろこびてむかふる人のさま見てもわか世にあらんとめをはしれ

(上) 全 譯 げにもしかりく

十六日 耶馬溪をすきて

なかむれば山路のうさもわすられぬ耶馬溪川の秋のけしきを

全 評 絶 調

山ひめのすみかいつこと人間は、豊の國なる山とこたへん

十七日 筑後川を下る

いにしへの人のいふきの残れはや川波いまもたちさわくなり

全 評 頼翁の長篇を廿一文字にいひ盡せり

竹窓聽雨

風、た、ね、し、竹、に、名、残、の、音、立、つ、る、時、雨、を、そ、き、く、窓、の、あ、け、く、れ

襟堂陳人評 幽味想ふべし

夕 雁

村、す、ゝ、き、残、る、冬、野、の、夕、ま、く、れ、れ、つ、る、か、り、か、ね、ま、つ、と、さ、え、ゆ、く

山 全 評 まつぞ一首の眼

枯 野

虫、の、根、も、千、草、の、花、も、夢、の、う、ち、に、枯、れ、ゆ、く、野、邊、の、見、る、影、も、な、き

全 評 見る影もなきさいひにめたる餘情不盡殊に夢の字影の字相映してよし

松窓雨聲多

は、れ、間、に、も、時、雨、の、窓、に、音、す、な、り、今、宵、も、同、し、松、風、の、ふ、く

石橋愛太郎